

ミヤマキリシマ

「カタカタ、カタカタ」新燃岳しんもえだけから五十キロメートル以上離れた宮崎市にある由紀子の家の窓も不気味に揺れた。噴火ふんかの影響えいぎょうだ。いわゆる空振くうしんである。

由紀子の祖父母は、新燃岳の麓ふもとの町で農業を営みながら、ずっと二人で暮らしている。新燃岳の噴火はだいぶ収まってきたし、避難勧告ひなんかんこくも解除になって自宅もとに戻ることができた。それでも由紀子は、新燃岳の近くで暮らす祖父母のことが心配でならなかった。

そんなある日、由紀子は、父親に聞いてみた。

「ねえお父さん。おじいちゃんたち、もう歳としなんだし、この家で私たちと一緒に暮らせばいいんじゃない。新燃岳も、またいつ噴火するかわからないし。」

「そうだなあ・・・。」

父親の返事ははつきりしない。

「ねえ、お母さんはどう思うの。こっちで暮らした方が絶対安全だし、大きな病院やお店も近くて、おじいちゃんたちも安心だと思っただけど。」

と母親にも聞いてみた。

「そうねえ。今度の土曜日に、灰の片付けのお手伝いにみんなで行くでしょう。その時、由紀子がおじいちゃんたちに話してみなさいよ、そのこと。」

土曜日、由紀子たちの家族は、父親の運転する車で祖父母の家へ向かった。いつもなら、鼻歌を歌ったりお菓子を食べたりしながらドライブ気分の由紀子も、この



日は、往來する車がまき上げる灰、道路わきの畑や家々の屋根の上に降り積もっている灰のあまりの凄さに、ずっと黙ったままだった。

「みんな、ありがとう。今日はこれで終わりにしよう。」

「ふーっ。」

祖父の言葉を聞いた由紀子は、腰を伸ばしながら大きく息を吐き、額の汗をぬぐった。

「ありがとな由紀子。おかげでだいぶきれいに片付いた。本当に助かったよ。疲れたじゃろ。」

「ううん。部活で鍛えているから、これぐらい大丈夫よ。」

少し張りを感じる腰をおさえながら、由紀子は精一杯の笑顔で答えた。

「それより、おじいちゃん……。」

「何じゃ。」

「あの……。」

「おじいさん、由紀子。何しているの。お茶が入りましたよ。」

居間から、祖母の声。

「おじいちゃん、あとで。」

「何じゃ、変なやつじゃなあ。」

みんなでお茶を飲みながらしばらくとりとめのない話をした後、祖父の方から問いかけてきた。

「そういえば由紀子。さっき何か話したそうじゃったな。」

由紀子は意を決したように正座をし、話し出した。

「おじいちゃんとおばあちゃんに提案があるの。まだまだ噴火も心配だし、宮崎市に引っ越して私たちと一緒に

暮らさない？おじいちゃんたち、もう歳も歳なんだし、大きな病院やお店も近い私たちの家で一緒に暮らしましょうよ。また噴火があるかもしれないし、私、心配なの。」

由紀子の話を聞いた祖父は、しばらくだまったまま天井を見つめている。そんな祖父を祖母や父母はじっと見つめている。

祖父は、おもむろに立ち上がると、何やら小さな額に入ったピンク色の花の写真を持ってきた。

「由紀子はこの花を知っておるか。」

「きれいな花ね。何という花なの。」

「ミヤマキリシマじゃよ。霧島山など九州各地の高山に自生しておるツツジの一種じゃ。今回の新燃岳の噴火による降灰で埋まってしまい、霧島山のミヤマキリシマは絶滅が心配されておるんじゃ。」

「何とか保護できないのかしら。」

「おそらく、そういうことはせんじゃろ。ミヤマキリシマは一メートルほどの低木で、火山活動や強風などの厳しい自然環境に適応しながら生きのびてきた植物じゃ。逆に環境がよくなって、他の植物が生え始め森林化が進むと生きのびられなくなる。わしは信じておる。根は灰の下で生きておる。ミヤマキリシマはきつと復活するよ。」

「おじいちゃん……。」

「由紀子の提案はとてもありがたいと思う。でも、ばあさんとわしは、これからもここで生きていくよ。今回、新燃岳の噴火では大変な目にあっただし、みんなにも心配や迷惑をかけた。自然の脅威の前では人間の力はちっぽけなもんじゃと改めて感じたよ。しかし、ここの自然、霧島山の豊かな恵みのおかげでわしらはこれまで生き



てこられたんじゃ。あと何年生きられるか分からんが、ばあさんとこの土地で自然と向き合いながら、自然の恵みを感じながら生きていきたいと思う。」

「私も同じ気持ちよ、由紀子。ありがとう。」

由紀子の頬をやさしく両手で包みながら祖母もそう言った。

「やっぱりなあ。」

宮崎市に帰る車中、父親は一言だけつぶやいた。

「それ、きれいなだけじゃなくて、力強い花なのね、由紀子。」

祖父にももらったミヤマキリシマの写真をじっと見つめる由紀子に母親が静かに語りかけた。

「うん。」

そう返事しながら由紀子が霧島山の方をふり返ると、新燃岳の火口から立ち上る火山ガスが、夕日に赤く染められていた。

それから約一年半後、七月十一日の早朝。

「由紀子。新聞、新聞。新聞見てみる。」

父親がめずらしく興奮して、由紀子に向かって新聞を差し出した。

由紀子が思わず握りしめた新聞にはこう記してあった。

『昨年の新燃岳噴火による降灰でミヤマキリシマは全て埋まってしまう絶滅が危惧されていたが、根が残っていたため群生が復活』

